

2024年6月2日聖霊降臨後第2主日説教

申命記 5章 6-21 節

コリントの信徒への手紙二 4章 5-12 節

マルコによる福音書 2章 23-28 節

本日から教会歴では、聖霊降臨後の期節が本格的に始まりました。いわゆる緑の期節の始まりです。今年度は復活日が比較的早い時期でしたので、特定は4から始まります。本日の旧約日課は、申命記における十戒の箇所です。十戒は、律法のコア部分ですが、教会の信仰と生活にとっても重要な指針です。わたしたちの教会では用いていませんが、『祈祷書』の聖餐準備の式に、「十戒による準備」があります。

十戒は、モーセが、出エジプトという出来事の途中で、シナイ山において主なる神様から授かった戒律です。本日は、9節にあります、「**私は主、あなたの神、妬む神である**」という部分から学びたいと思います。

この箇所は、前の新共同訳聖書では、「熱情の神」と訳されていました。ただし、その前の口語訳聖書では、「ねたむ神」と訳されていたので、元来の訳に戻ったと言えます。さらに前の文語でも「嫉（そね）む神」と訳されていました。

ここで用いられているヘブライ語は、名詞で第一に「ねたみ、嫉妬、そねみ」を意味し、動詞で「ねたむ、嫉妬する、そねむ」です。同じ十戒について記した出エジプト記 20章 5節でも「妬む神」（新共同訳「熱情の神」、口語訳「ねたむ神」）と訳されています。また出エジプト記 34章 14節には、この「妬み」（新共同訳「熱情」、口語訳「ねたみ」）が主なる神様の名前とも書かれています。『聖書（旧約）』において、主なる神様の名前を示すヘブライ語の4文字は、声に出して読むはいけないので、声に出してよい名前は「ねたみ、嫉妬」ということになります。『聖書（旧約）』の主なる神様は、「妬む神」（新共同訳「熱情の神」、口語「ねたむ神」、文語訳では「嫉妬神」）だということです。

さて、この「妬む」という動作は、ことに「嫉妬」ととらえますと、人の行動のあり方として、あまりお勧めできない響きがあります。確かに『聖書（旧約）』において動詞の形では、ペリシテ人のイサクへの妬み（創 26:14）、ラケルの姉レアへの妬み（創 30:1）など、人間として負の感情があるような描写に用いられています。しかし、『聖書』が主なる神様について「妬む」と書き記すのは、神様に対する一つの理解が関係しています。それは『聖書』の神様は、唯一であり、その唯一の神様のみに対する信仰を、イスラエルに求めているということです。この神様理解、そして信仰理解が、主なる神様に用いられた「妬み」という言葉の本質なのです。

「妬み」が『聖書（旧約）』の主なる神様の本質を示すと言いましても、新共同訳聖書が「熱情の神」と訳したことは、単に「妬み」という言葉の否定的な響きを避けたからではありません。『聖書』の中の「ねたむ」という動作には、激

しい感情が込められているからです。本日の旧約日課と同じ申命記の32章21節に「彼らは神ではないもので私の妬みを引き起こし空しいもので私を怒らせた。そこで、私も民ではないもので彼らを妬ませ、愚かな国民で彼らを怒らせる」とあります。また、「ねたむ」という言葉は、別な箇所では「怒る、いらだつ、心を燃やす」、あるいは「情熱、激情」という意味でも用いられているのです。そのことを証しするように、ヘブライ語聖書のギリシア語訳では、この言葉は、「ねたみ」ではなく「熱心、熱情」を主に意味する言葉で訳されていました。そのことから想像しますと、初代教会の人々が用いていた『聖書(旧約)』は、おもにギリシア語訳ですから、ヘブライ語で読んだ人たちが主なる神様について、「ねたみ」を中心に信仰を考えていたのに比べて、「熱心、熱情」の神様と受け止めていたのかもしれませんが。それゆえ、「妬む神」という訳は、第一の意味を一番示しているといえるのですが、「熱情の神」という新共同訳の訳語は、教会としては良い訳だったのかもしれませんが。

それでは、『聖書(旧約)』の主なる神様は、何に対して妬む方なのでしょう。熱心なのでしょう。それは先ほど申しました通り、イスラエルに対してです。しかし、『聖書(旧・続・新)』を通してわたしたちは、それがわたしたち教会に連なるキリスト者に対して、さらにすべての人間、そして、ご自分が創造されたすべてに関して向けられていることを知ります。つまり主なる神様は、熱心さをもって、人間をはじめとして、創造されたすべてを愛すことに、妬むほどに熱心なのです。

ただし、この主なる神様の「妬み」は、主なる神様が唯一であること、その方のみを信じることと一体となっています。それゆえそれは、現代的な感覚から言えば、多様性を認めず、排他的で、ただ自己中心的のようにも思えます。だから宗教が紛争の種になっていると言われそうです。しかし、そのように語る人間は、現代でも十戒の一つも守ることすらできない状態にいます。自分たちの理想やイデオロギー、歴史観、欲望、願望などなどを崇め、偽証し、奪い合い、そして不当な殺人を繰り返しているからです。そのような状態の人間が、『聖書(旧約)』が示す主なる神様を否定して、何を実現できるのでしょうか。その問いに対する明確な答えがないまま、今も悲劇がただ繰り返されるだけです。

先週、わたしたちは、主なる神様がイエス様を通して示された愛は、三位一体的にしか人間には理解できないことを学びました。その三位一体という理解の背景にあるのも、主なる神様の妬み、熱心さです。そして、そうであるがゆえに、わたしたちはそのことに気づいたとき、他に比較しようのない希望が生まれるのです。本日の使徒書で、パウロは、「私たちは、四方から苦難を受けても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、迫害されても見捨てられず、倒されても滅びません」(2コリ4:8-9)と語ります。「妬み」を中心に主なる神様を理解していたパウロが、教会の信仰へと大きな転換をしたのは、その妬みの本質に、イエス様を通して熱情的な愛を感じたからでしょう。そして、そこに今までにない希望を感じたからでしょう。わたしたちもこの希望のもとに、これからも歩んでいきたいと思えます。またその希望を人々に示していきたいと思えます。